〈無量寿経〉における仏の〈威力〉について

弘　中　満　雄

梵文無量寿経（以下，*Sukh.*）の序分では，釈尊が阿難へ次のことを述べる．

しかしまた聖者阿難よ！そなたが「一切世間の師であるもの（仏）たちの世間への出現のため，菩薩・摩訶薩たちの利益のために，この事（今日，如来の様相がすばらしい事）を如来に尋ねなければならない」と考えた事は，実に如来の威力（anubhāva）［によるもの］である[1]．

これは阿難の，釈尊に対して教説の開始を願い求めた発言が，実際には，釈尊自身によって発言せしめられたものであることを示している．ここで言われる「如来の威力（buddha-anubhāva）」とは，仏の超自然的な神通力であるが，この力が阿難をして如来の様相を希有なるものと気づかしめ，その因縁を問わせるように差し向けたのである．この事に関して，岩波文庫の「威力」の註釈では，「威力—anubhāva. すべての善き行ないは仏のはからいにほかならぬ，という他力の思想の萌芽がここに認められる[2]」とコメントし，浄土教の他力思想，すなわち阿弥陀仏の利他力との関連性を指摘する．

この〈無量寿経〉のように，説法の開始が対告衆の側ではなく，如来の側，「如来の威力」によってなされるというのは，他の経典にもみられる現象である．しかしながら，阿弥陀仏の利他力が特に重要な問題となる浄土教において，この「如来の威力」に関する表現は注意されるべきではないだろうか．

〈無量寿経〉では，このような如来の威力を，「威力」の他，「神力」，「威神力」などと漢訳する．その使用例はほとんどが仏徳讃歎の場合に用いられるが，その中，具体的に仏の〈威力〉がどのような現象・効果をもたらしているかを説く箇所もある[3]．

Sukh. にも，先程の序分の引用箇所以外，仏の威力とその具体的効果を述べた箇所はいくつかある．その場合，原語は anubhāva の他，adhiṣṭhāna という語も用いられる．そこで以下，この *Sukh.* における anubhāva と adhiṣṭhāna の使用例を整理し，改めて浄土教における阿弥陀仏の利他力について考えてみたい．

ところで anubhāva は，√bhū（～になる）に接頭辞 anu- を付した動詞からなる男性名詞である．辞書では「兆候」，「権威」，「信念」といった意味が出され，漢訳では「威力」「神力」等と訳される．それに対して adhiṣṭhāna は，√sthā（立つ）に接頭辞 adhi- を付した動詞からなる中性名詞で，「立脚点」，「立場」，「支配力」，「基盤」といった意味がある．漢訳では「加護」等と訳される．このように両語は厳密には意味が異なるが，便宜上，〈威力〉という言葉で両語を総称する．

なお adhiṣṭhāna は密教の「加持」の原語でもある．そのため adhiṣṭhāna の原典研究は種々存在する[4]．それらによると adhiṣṭhāna は仏・菩薩共に有する超自然的な力であること，また誓願・奇跡・恩寵等の意味が含まれること等々が綿密に調査・考究されている．しかし〈無量寿経〉の adhiṣṭhāna についての言及は確認できなかった．

Sukh. における〈威力〉と本願力

Sukh. の〈威力〉の使用例は 10 例である．それは次のような内容である．

①：釈尊の〈威力〉（anubhāva）は，阿難に釈尊の様相を問わしめる．

②：阿弥陀仏の〈威力〉（anubhāva）によって，往生者は他方仏土への供養が可能となる．

③：師仏である世自在王仏の〈威力〉（anubhāva）は，法蔵菩薩に偈頌を語らせる．

④：諸仏の〈威力〉（adhiṣṭhāna）によって，諸仏の光明の量は様々である．

⑤：阿弥陀仏土に対して疑念がある者は，[阿弥陀] 仏の〈威力〉（adhiṣṭhāna）を不可思議と領解できない．

⑥：阿弥陀仏の威力（adhiṣṭhāna）によって，往生者は三法忍を獲得する．

⑦：阿弥陀仏の〈威力〉（anubhāva）によって，往生者は他方供養が可能となる．

⑧：阿弥陀仏の〈威力〉（adhiṣṭhāna）によって，往生者は他方供養が可能となる．

⑨：[阿弥陀] 仏の〈威力〉（anubhāva）によって，衆生は阿弥陀仏等を此土で見ることができる．

⑩：[阿弥陀] 仏の〈威力〉（adhiṣṭhāna）によって，衆生は良い利得を得る[5]．

以上であるが，このように〈威力〉の主体は，大凡，阿弥陀仏と推測でき，その効果は様々である．

この中，本願力としての〈威力〉の用例に注目してみたい．すなわち，用例⑥では次のように述べられている．

そして彼らは三つの認知，すなわち音声に従うという［認知］（音響忍）と，随順という

［認知］（柔順忍）と，不生［不滅］の法の認知（無生法忍）を得る．［これらは］，実にかのアミターユス如来の前世の誓願（本願）の〈威力〉(adhiṣṭhāna) によって，［彼の］前世の勝利者への奉仕によって，そして［彼の］前世の誓願の修習が，よく為され，よく修習され，不足もなく，損なわれることもない事によって［得られるのである］[6].

このように，〈威力〉の本質が阿弥陀仏の「本願」にあることを明示し，その果報を描写している．同じように，用例④でも，主体は阿弥陀仏ではないが，「前世の誓願の威力（adhiṣṭhāna）によって[7]」と示されている．

また用例②・⑦・⑧の三例は，何れも往生者（菩薩）の他方供養に関するものである．②は本願文中の第22願「供養諸仏願」（『無量寿経』では第23願）であり，⑦・⑧はその成就文に相当する段落の冒頭と結末箇所である．三例は次の如くである．

②もしも，世尊よ！私が，覚りを得たにも関わらず，かの仏土において，再び生まれるであろう菩薩達が，全員，一朝食［ほど］の間に他の仏土に行き，百の多くの仏達，千の多くの仏達，十万の多くの仏達，千万の多くの仏達，乃至，十万千万那由他の多くの仏達に対して，安楽のために必要なあらゆる物をもって仕えないならば―すなわち仏の〈威力〉(anubhāva) によって［そうするのであるが］―，私は無上の正覚に目覚めたくはない[8].

⑦また，阿難よ！かの仏土に生まれた菩薩たちは，全員，一朝食［ほど］の間に，他の諸世界へ行き，十万千万那由他の多くの仏達に仕える．そして，仏の〈威力〉(anubhāva) によって，彼らが望むかぎり［諸仏を供養できる］[9]

⑧［以上のように，極楽の菩薩が他方仏土へ行き諸仏に供養できるのは，］実にかのアミターユス如来の前世の誓願（本願）の〈威力〉(adhiṣṭhāna) に摂め取られた事によって，［アミターユス如来から］前世に聞法［の機会］を施与された事によって，前世に勝利者へ善根を植えたことによって，前世の誓願が成就・成満し，不足もなく，よく分別・修習されたことによってである[10].

用例②と⑦はほぼ対応する表現であり，また⑦と⑧も同じ段落の冒頭と結末であることから，意図する内容は同じであろう．そうであるならば，⑦で anubhāva とあるところを，後の⑧では「pūrvapraṇidhāna（前世の誓願）」における adhiṣṭhāna として示したことになる．このことから，adhiṣṭhāna は anubhāva の具体的意味内容，より積極的に表現した語といえ，それによって *Sukh.* における anubhāva の語にも，本願力としての意味をうかがうことができよう．

このように *Sukh.* においては，本願の力を〈威力〉として表現し，往生者の果徳が，阿弥陀仏の本願力によるものであることをみてとれる．先行研究もふれて

いるように，adhiṣṭhāna には既に誓願の意味が含まれているようであるが[11]，阿弥陀仏の根源的な救済力の要因が，本願力にゆだねられていることが，改めて，この事例から窺える．

---

1) A. は足利本，F. は藤田本（藤田宏達『梵文無量寿経写本ローマ字本集成』，第 3 巻，1996）を指す．たとえば A. 4.22 とは，足利本の 4 頁 22 行目のことである．
api tu khalv āryānanda, tathāgatasyaivaiṣo 'nubhāvo, yas tvaṃ sarvalokācāryāṇāṃ (A. -ācāryāṇām(F. 30)) sattvānāṃ loke prādurbhāvāya bodhisattvānāṃ mahāsattvānām arthāya tathāgatam etam arthaṃ pariprasṭavyaṃ manyase.（句読点，下線は筆者による）A. 4.22-5.3, F. 29-30. Cf. 蔵訳 de bzhin gshegs pa'i mthu（如来の威力），香川孝雄『無量寿経の諸本対照研究』，1984, pp. 76-77.

2) 『浄土三部経（上）』岩波文庫，p. 252.

3) 〈威力〉の具体的な効果を説く箇所は次の 13 箇所などにみられる．(01)T12. 319c22, (02)T11. 94a12, T12. 268b15, (03)(T12. 320a11), (04)T12. 320a18-19, (05)T11. 94c28, T12. 320c29, (06)T12. 270a13-14, (07)T12. 292b15-16, 310b25, (08)T11. 96c04-07, T12. 271a13-15, (324b23-24), (09)T11. 98c08-09, T12. 273c04-05, (285c26-29, 306a01-04), (10)T11. 98c18-21, (11)(T11. 99c23-25), T12. 325a27-28, (12)T11. 101a15, (13)T12. 326b09.（括弧内は，〈威力〉の語はないが，関連する箇所）

4) 主な論文としては以下のものがある．渡邊照宏「Adhiṣṭhāna（加持）の文献学的試論」，『成田山仏教研究所紀要』，1977.，生井智紹「自身加持―その語義と諸形態―」，『印度学仏教学研究』44-2, 1996.，生井智紹「真言理趣による行の確立」，『インド密教の形成と展開』，1998.，田村智淳「『華厳経・入法界品』における「威神力」」，『戸崎宏正博士古稀記念論文集：インドの文化と論理』，2000.，伊藤瑞叡氏諸論文．

5) ① A. 4.22-5.3, F. 29-30. ② A. 14.24-15.7, F. 103-105. ③ A. 21.14-15, F. 149-150. ④ A. 27.7-12, F. 189-191. ⑤ A. 34.1-6, F. 245-247. ⑥ A. 48.16-21, F. 344-346. ⑦ A. 50.2-5, F. 355-356. ⑧ A. 50.23-51.3, F. 362-364. ⑨ A. 55.20-56.3, F. 399-401. ⑩ A. 63.16-18, F. 461-462.

6) tisraś ca kṣāntīḥ pratilabhante, yad idaṃ ghoṣānugām ānulomikīm (A. anulomikām (F. 345)) anutpattikadharmakṣāntiṃ ca/ tasyaivāmitāyuṣas tathāgatasya pūrvapraṇidhānādhiṣṭhānena, pūrvajinakṛtādhikāratayā, pūrvapraṇidhānaparicaryayā (A. pūrvapraṇidhānaparicaryayoś (F. 346)) ca susamāptayā, subhāvitayānūnāvikalayā (A. subhāvitayānūnāvikalatayā (F. 346)).

7) A. 27.8, F. 190.

8) sacen me bhagavan bdhiprāptasya, tadbuddhakṣetre ye bodhisattvāḥ pratyājātā bhaveyus, te sarva ekapurobhaketenānyāni buddhakṣetrāṇi gatvā, bahūni buddhaśatāni, bahūni buddhasahasrāṇi, bahūni budhaśatasahasrāṇi, bahvīr buddhakoṭīr, yāvad bahūni buddhakoṭīniyutaśatasahasrāṇi, nopatiṣṭheran sarvasukhopadhānair, yad idaṃ buddhānubhāvena, mā tāvad aham anuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisaṃbudhyeyam.

9) tasmin khalu punar ānanda buddhakṣetre ye bodhisattvāḥ pratyājātāḥ, sarve ta ekapurobhak-

tenānyāṃl lokadhātūn (A. ekapurobhaktenānyalokadhātūṃ (F. 355)) gatvānekāni buddhakoṭīnayutaśatasahasrāṇy upatiṣṭhanti, yāvac cākāṃkṣanti buddhānubhāvena.

10) tasyaivāmitāyuṣas tathāgatasya pūrvapraṇidhānādhiṣṭhānaparigraheṇa pūrvadattadharmaśravaṇena, pūrvajināvaropitakuśalamūlatayā, pūrvapraṇidhānasamṛddhiparipūryānūnayā suvibhaktabhāvitayā (A. suvibhaktābhāvitayā (F. 364)). A. 50. 27-51. 3, F. 363-364.

11) 渡邊前掲論文 , p. 85.

〈キーワード〉 威力, anubhāva, adhiṣṭhāna

（龍谷大学院研究生）

新刊紹介

中村　元監修・木村清孝・末木文美士・竹村牧男編訳

『エリアーデ仏教事典』

A5・677 頁・定価 12,600 円
法蔵館・2005 年 10 月

tionship between "self-nature" and "activity" of dharmas. According to the Sarvāstivādins, the self-nature of a dharma exists permanently, but its activity exists only in the present.

Vasubandhu, in the *Abhidharmakośabhāṣya*, criticizes this position, saying that it is contradictory to claim that the self-nature of a dharma and its mode of existence (≒ activity) are neither identical nor different. Vasubandhu thinks that a conditioned dharma's self-nature and its activity exist only in the present and are identical.

Originally, Vasubandhu, as a Sautrāntika, had nihilistically understood the ultimate nirvāṇa as the state of total extinction of body and mind. Later, he changed to the Vijñānavāda position which maintains that *tathatā* (*asaṃskṛta and anāsrava*) and dharmas of the phenomenal world (*saṃskṛta* and *sāsrava*) are neither identical nor different, for the differences between *asaṃskṛta* and *saṃskṛta* disappear by the transcendence of *saṃskṛta-dharmas* from time and space.

Although Vasubandhu still does not allow that a conditioned dharma's self-nature and its activity are neither identical nor different, he admits that the relationship between the supramundane and mundane existences is neither identical nor different. By applying this concept, he discovered the connection between *nirvāṇa* and *saṃsāra*.

193. *Anubhāva* and *Adhiṣṭhāna* in the *Sukhāvatīvyūha*

Mitsuo HIRONAKA

This is one consideration of the "other power" thought of Pure Land Buddhism. Concretely, the point of view is applied to the language of Buddha's supernatural power (*anubhāva* or *adhiṣṭhāna*) in the *Sukhāvatīvyūha*, namely terminology and examples of the use of expressions referring to Amitābha Buddha's altruism. There are ten examples in all, and five of the examples are related to the power of the vow of Amitābha (or Buddhas). Although it seems that the meaning of a vow is already contained in *adhiṣṭhāna*, from these examples we learn that the power of Amitābha to save is left to this

vow's power.

194. *Vastuprativikalpavijñāna* in the *Laṅkāvatāra-sūtra*

Yu-shik CHUNG

The term *vastuprativikalpavijñāna* used in the *Laṅkāvatārasūtra* has so far been regarded as the *manovijñāna* or seven *pravṛttivijñāna*s etc. However, it can be concluded from my investigation of the characteristics of its relevant terms as described in the *Laṅkāvatārasūtra* and the 『顕揚聖教論』 that the *vastuprativikalpavijñāna* is therein given almost the same characteristics as those of the *ālayavijñāna*.

195. On the Six Characteristics in the *Ārya-daśabhūmi-vyākhyāna* (ADV)

Kyung-nam KIM

The Six Characteristics (六相) generally have been positioned as the basis of the "Interfusion of the Six Characteristics" (六相円融) from the Huayan (華厳) school's standpoint, but not much study has been done on the Six Characteristics in the ADV itself. The purpose of this paper is to clarify the meaning of the Six Characteristics in the ADV, specifically focusing on the transfiguration of an equivalent and the context of the Six Characteristics.

In conclusion, we can find that the Six Characteristics, used as the method of annotation in the ADV, are more embodied in a comparison of the *Daśabhūmika-sūtra* (十地経). Also, it is noted that transfiguration of the Six Characteristics is shown more clearly in the Tibetan version of ADV than in the Chinese version.

196. On the Citation of the *Svapnanirdeśa* in the *bSam gtan mig sgron*

Izumi MIYAZAKI

The Gradualist chapter of the *bSam gtan mig sgron* (*SMG*), ascribed to gNubs chen Saṅs rgyas ye śes, cites from the *Svapnanirdeśa* (*Svap*), a part of